

「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学 文学研究科 ドイツ語学ドイツ文学専修 博士課程1年 (橋本 紘樹)

ハイデルベルク・ストラスブール派遣プログラムは、京都大学・ハイデルベルク大学共同学位制度の設置に向け、「文化越境研究」を通じたワークショップなどにより、協定大学間の学生交流を深めることを目的として行われている。本研修における個別のプログラムの詳細は他の参加者の方々が報告してくれるので、私はハイデルベルク滞在を中心に、少しばかり俯瞰的に記述し、研修での経験の全体像とそこから得ることのできた知見を報告しようと思う。

派遣プログラムでは、日本には体験することのできない貴重な機会が数多くあった。なかでも、初日に行われたハイデルベルク文化越境研究センターに属する学生とのワークショップは、世界各国から集まった学生たちの専門分野が様々で、発表や議論も多様性に富んだものであったため、刺激的であった。しかしながら、英語で進行するプレゼンテーションやディスカッションはレベルが高く、しばしば正確に追うことができず、質問を交えた会話を行う際にも十分な表現ができなかったため、しばしば場に取り残される思いをしたことも事実である。その際に印象的だったのは、ハイデルベルク大学の学生たちが、不十分な表現しかできない私たちに対して、懸命に理解しようとする姿勢を絶えず見せてくれたことである。そのおかげで、お互いに意見を交え、理解を深めることができた。このことは、ワークショップ後の食事や、二日目以降、一部の学生とハイデルベルクの街を一緒に歩いた時も同じであった。こうした経験のおかげで、こちらが相手を理解しようとし、自分のことを理解してもらおうと努めれば、相手も必ずそれに応じてくれるという素朴な、それでいて根底的な事実に気づくことができた。また、研修のなかでハイデルベルク大学の日本学科を訪問し、図書館の蔵書を見せていただいたのだが、これも非常に面白く有意義な経験であった。日本語の本が図書館にあるということは、私たちにとって極めて日常的なことである。しかし、日本から遠く離れたドイツで、日本語の蔵書で研究が行われているという事実にある種の新鮮味を感じた。自らの国の文化が他国に受容され、文化間での交流が進展しているのを目の当たりにしたように思えたからである。

これはストラスブール大学でのことになるが、ワークショップの締めくくりに、同大学のシャル先生と京都大学のカム先生が、「他者」として異なる文化圏に身を置くことの意義と、いかに微力であれ「他者」を排除する構造に抗して実践的に取り組むことの必要性を、ご自身の体験に即して話された。短い期間ではあったけれども、この派遣プログラムを通じて学ぶことができたことは、まさに両先生のこの時の発言に集約されるものであったように思われる。私のなかで研修の経験は、「他者」と相互理解という問題を捉えなおし、グローバリゼーションとナショナリズムという世界的な問題を前に、個人として何をなすうのかということを見つめなおす契機となった。

そして、このような素晴らしい経験をすることができたのも、本プログラムを支援し、参加学生が研修に集中して取り組むことができるよう、全面的に支えてくださった方々のおかげである。京都大学をはじめ、ハイデルベルク大学、そしてストラスブール大学において、本研修に尽力し、関わってくださった全ての方々への深い感謝を、最後に申し添えておきたい。